

木曾三川「Q&A」～皆さまからのお問い合わせより～

- 明治改修の総工事費（当時の価格で約974万円）は、政府が全負担したのか。外国からの援助があったのか。
- ヨハネス・デ・レイケ等のオランダ人は、政府が推薦した人が呼ばれたのか。
- 明治改修全体の従事者は。（どのような組織で延べ従事総数はどのくらいか。）
- 宝暦治水の施工範囲が知りたい。
- 「道塚堤」の読み方が知りたい。

質問	明治改修の総工事費（当時の価格で約974万円）は、政府が全負担したのか。外国からの援助があったのか。
回答	政府（国）と県（愛知・岐阜・三重）の負担で施工され、外国からの資金援助はありませんでした。総工事費の83.9%にあたる817万の国費が当てられました。
参考資料	<p>①『木曾三川治水のあゆみ』木曾三川治水百年のあゆみ編集委員会/編 建設省地方整備局 1995 →P184 「工事費」</p> <p>②『KISSO Vol.65』財団法人河川環境財団/編 建設省中部地方整備局木曾川下流工事事務所 2008 →P9 予算額について https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL65.pdf</p> <p>③『木曾川改修工事』内務省土木局 1919（複製版：建設省木曾川下流工事々務所 1968） →P92～93 資料①の数字の基資料となっています。</p> <p>④『木曾川改修工事概要』内務省名古屋土木出張所 1911（複製版：建設省木曾川下流工事々務所 1968） →P99～100 資料③と内容的に大きな差異はないが、工事費・工事数量に少し差があります。</p> <p>⑤『木曾三川 歴史・文化の調査研究資料 明治改修完成百周年特別号 KISSO』国土交通省地方整備局木曾川下流河川事務所 2013 →この資料は、明治改修全般ついてまとめられています。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOLtokubetu.pdf</p> <p>①～⑤は、木曾川文庫に所蔵あり。</p>

質問	ヨハニス・デ・レイケ等のオランダ人は、政府が推薦した人が呼ばれたのか。
回答	<p>明治3（1870）年、政府（民部土木司）は、水利施設（治水や築港）のためにオランダから技師を招聘（しょうかん）することを決定し、当時、日本で働いていたオランダ人医師のA・F・ボードウィンに人選を依頼しました。その結果ファン・ドールンとリンドが日本政府に推薦され、明治5（1872）年に来日しました。翌年には、ドールンの推薦によるエッシャーとデ・レイケ及びチッセン、そしてデ・レイケの紹介によるアルンストの4名が招聘されました。</p>
参考資料	<p>①『KISSO Vol.36』財団法人河川環境管理財団/制 建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所 2000 →P7 「オランダ人技師団の招聘」 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOL36.pdf</p> <p>②『日本の川を甦らせた技師デ・レイケ』上林好之 草思社 1999 →P45 「ファン・ドールンの来日」オランダ人技術者の人選について記されています。</p> <p>③『蘭人工師エッセル 日本回想録』龍翔館（三国町郷土資料館）/編 福井県三国町 1990 →P38 エッシャーの回想録で、日本からの技師要請を耳にするも当初叶わず、翌年にファン・ドールからの誘いの手紙が来た事などが記されています。</p> <p>④『明治の国土開発史 近代土木技術の礎』松浦茂樹 河相全次郎・鹿島出版会 1992 →P48～ 「オランダ人技術者の来日」オランダ人招聘までの詳細が記載されています。</p> <p>⑤『日本の近代化とお雇い外国人』村松貞次郎（株）日立製作所 1995 →P58～ 「河川改修の土木技術」</p> <p>⑥『木曾三川 歴史・文化の調査研究資料 明治改修完成百周年特別号 KISSO』国土交通省地方整備局木曾川下流河川事務所 2013 →P74 この資料は、明治改修全般についてまとめられています。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOLtokubetu.pdf</p> <p>①～⑥は、木曾川文庫に所蔵あり。</p>

質問	明治改修では、どのような人が施工に従事したのでしょうか。
回答	<p>各県の担当機関及び内務省の土木監督署の職員（土木監督局の組織の詳細は、参考資料①②）と人夫として地元の人が作業に従事しています。従事した人数については、具体的な数を記したものではありませんが、ほぼ人力のみでの工事ですので相当な人数であったと考えられます。</p>
参考資料	<p>①『木曾三川治水のあゆみ』木曾三川治水百年のあゆみ編集委員会/編 建設省中部地方建設局 1995 →P183 「工事施工の組織」</p> <p>②『船頭平閘門改築記念誌』財)河川環境管理財団/編 建設省中部地方建設局・木曾川下流工事事務所 2006 →P21～23 「工事施工の組織」</p> <p>明治11(1878)年、美濃国羽栗郡竹ヶ鼻村(現在の羽島市竹鼻町)に内務省木曾川土木局出張所が創設され、これが現在の中部地方整備局 木曾川下流河川事務所の始まりです。</p> <p>③『木曾川下流改修工事の昔話』(工学博士名井九介氏述)内務省名古屋土木出張所 1937 ※名井氏は、明治改修に携わった内務省の技師 →P23 「工事の施工」</p> <p>ほぼ人力の工事であったことと、木曾川沿岸の住民による人夫であったことが記されています。</p> <p>④明治三十七年八月調『木曾川改修沿革』木曾川下流増補事務所(復刻版:木曾川下流事務所 2006) →「第八 人夫賃仕拂方法及び人夫総代」 人夫への賃金の支払い方法について記されています。</p> <p>①～④は、木曾川文庫に所蔵あり。</p>

質問	宝暦治水の施工範囲が知りたい。
回答	<p>木曾三川河口から桑原輪中（羽島市）の北端（約 60 k m）までの流域で、関係の村は、美濃・尾張・伊勢をあわせた 193 ヶ村に及ぶ広大な区域であったため、工区は一之手から四之手に区分されていました。</p> <p>一之手 桑原輪中（岐阜県羽島市）から神明津輪中（愛知県稲沢市・愛西市）まで 二之手 梶島村（愛知県愛西市）から田代輪中（三重県木曾岬町）まで 三之手 墨俣輪中（岐阜県大垣市）から本阿弥輪中（岐阜県海津市）まで 四之手 金廻輪中（岐阜県海津市）から浜地藏（三重県桑名市）まで</p>
参考資料	<p>①『木曾三川歴史・文化の調査研究資料 宝暦治水 260 年記念特別号 KISSO』木曾三川歴史文化資料編集検討会/編 木曾川下流事務所調査課 2015 →P1～ 工事区域について記載されています。また、この資料は、宝暦治水全般についてまとめられています。 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/pdf/kisso-VOLtokubetu2.pdf</p> <p>②『木曾三川流域誌』木曾三川流域誌編集委員会・(社) 中部建設協会/編 建設省中部地方建設局 1992→P317 「宝暦 4 年御手伝普請分分担工区」</p> <p>③『岐阜県治水史 上巻』岐阜県/編 合名会社大衆書房 1981 →P545～工区別に、場所・工事種類・その延長が記載されています。</p> <p>④『木曾三川治水史上の奇跡—宝暦治水の実像—』丸山幸太郎/著者発行 2017 →「宝暦 4～5 年実施の薩摩藩御手伝普請の全容」工事箇所は、当初計画 230 か所（実際は増加し 350 か所以上）として、一覧ではありませんが、工区での工事内容が詳細に記載されています。</p> <p>⑤壱之手勘定帳 [複製] ⑥二之手勘定帳 [複製] ⑦三之手勘定帳 [複製] ⑧四之手勘定帳 [複製]→⑤～⑧は、一～四之手の普請に必要であった材料・人足などの数とその内訳を詳細に記して幕府御勘定所へ報告した文書の写しです。</p> <p>⑨『川とともに生きてきたⅢ—東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術—』名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室/編集発行 2004 →P26 「三之手水行・定式・急破御普請出来形絵図」</p> <p>⑩木曾川下流河川事務所 HP 木曾川水系流域史ライブラリー「三之手小屋」 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/kisomaps/win/124/map.html</p> <p>①～⑨の資料は、木曾川文庫に所蔵あり</p>

質問	「道塚堤」の読み方が知りたい。
回答	<p>読み方は「どうづかてい」です。</p> <p>岐阜県美濃市の山崎大橋（県道 94 号線）から上流約 800m の長良川左岸堤が「道塚堤」と呼ばれていて、明治期の小俣川開墾事業で築堤された小俣川締切堤の部分です。</p>
参考資料	<p>①『わたしたちの美濃市』美濃市社会科副読本改訂編集委員会/編 美濃市教育委員会 1992 →P138 「道塚堤をつくった人」 フリガナあり</p> <p>②木曾川下流河川事務所 HP KISSO「KISSO こぼれネタ VOL.50 美濃市特集」 →「道塚堤と小俣川開墾事業」 https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/kobore50.html</p> <p>③『美濃市史 通史編 下巻』美濃市/編集発行 1980 →P339 「道塚堤防と小俣川開墾事業」</p> <p>①・③の資料は、木曾川文庫に所蔵あり。</p>